
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No. 97

April 2015

2015年度大会は10月10日～11日 早稲田大学にて

事務局

ロシア史研究会 2015 年度の大会準備が始まっています。今年は 10 月 10 日（土）、11 日（日）の両日、行われます。場所は一日目が早稲田大学国際会議場（第一、第二会議室）、二日目が早稲田大学早稲田キャンパス 16 号館です。

今年 8 月には ICCEES 幕張大会が予定されていますが、ロシア史研究会大会での報告は、幕張での発表を日本語で改めて行うという形でもかまいません。

共通論題提案はすでに締め切られておりますが、自由論題・パネル応募締め切りまでにはまだ間があります（5 月 6 日（水））ので、ふるってご応募ください。事務局 (tulbi5386(at)gmail.com ※(at)は@) までお送りください。



（二日目の会場である 16 号館）

【ロシア史研究会 12 月例会レポート】

浅岡善治（東北大学）

アレクサンドル・リフシン（MGU）“Bridging the Gap: Government–Society Dialogue via Letters”

今回の報告者アレクサンドル・リフシン氏は、モスクワ大学行政学部のロシア・ソヴィエト史担当教授で、ソヴィエト期の社会政治史研究の第一人者である。90 年代以降、複数の研究グループが並行して進めた初期ソ連の手紙・投書分析を、イーゴリ・オルロフとの共同作業によってリードし、史料集『権力への手紙 1917–1927 年』（1998 年）、『同 1928–1939 年』（2002 年）、『ソヴィエト的日常生活と大衆意識 1939–1945 年』（2003 年）等の編纂のほか、『権力と社会：手紙のなかでの対話』（2002 年）においては、そうした現象自体についての社会史的考察を行った。このような、しばしば「特殊ロシア的」と見られながら現在まで続く、民衆の投書による政治権力に対する直接的働きかけについて、「権力への手紙（письма во власть）」という表現が浸透したのは彼らの仕事によるところが大きい。近年では、引き続きオルロフと共同で「大祖国戦争」期の政治宣伝の研究にも手を広げ、また単独名義で『ソヴィエト・ロシアにおける気分と政治的エモーション 1917–1932 年』（2010 年）を刊行している。これらの著作では国外の研究動向もフォローされ、そこでの最新の社会理論・歴史理論などの積極的な導入が図られており、これまで私個人は、同氏について、「西欧派」というか、「ウェスタナイズ」されたスマートな研究者という印象を持っていた。当日は、昨年『スラブ東欧評論』誌に発表された論文（英文）を基に流暢な英語でご報告された。ここでも「ソーシャル・キャピタル」などの概念が積極的に用いられていたが、後の質疑での返答では、現在の職場での立ち位置を意識して、多分に意図的にそうしているとのことだった。そういった点も含めて優れたバランス感覚をお持ちのようで、またさすがに同時代のソヴィエトのことには大変良く通じておられ、ほとんど隙が無い感じであった。

当日はあいにく年の瀬の土曜日ということで、東京での開催にもかかわらず出席者は私以外全員委員会メンバー（！）という状況だった。もちろん、委員のなかにもご自身のテーマとの関連でリフシン氏の研究に強い関心をお持ちの方が複数おられ（そのために遠方よりわざわざ上京された方もおられた）、会そのものはそれなりに盛り上がったのではあるが、出席者の少なさは如何ともしがたいものがあり、私も直後に所用が控えていた手前、終了後は懇親会も開けずの解散となった。リフシン氏は今回が初来日とおっしゃられていたが、当日札幌から単身で移動して来られ、例会終了後もそのまま宿に戻られるということで大変申し訳なく感じた。20 年代研究があまり活発ではないという現状もあるが、日本の研究コミュニティとして海外の優れた研究者から直接話を伺える機会をあまり有効に活用できなかった感は否めず、残念さが残った会であった。



（写真は例会の様子）

【シンポジウム「第一次世界大戦とロシア——コンドラシン教授を迎えて」】

(2015年3月21日、於早稲田大学)

鈴木健夫

早稲田大学ロシア研究所が主催し、ロシア史研究会と社会経済史学会関東部会が共催者となつて、東北大学東北アジア研究センターに短期滞在中のコンドラシン教授(Виктор В. Кондрашин、ペンザ教育大学、1961年生)を迎え、上記のシンポジウムが20名の参加者を得て開催された。同氏の報告「第一次世界大戦と地方」、それに日本側から左近幸村「第一次世界大戦へ向かうロシア：東西の港から考える」と広岡直子「第一次世界大戦におけるロシア帝国の避難民：「福祉」の観点から」が加わり、第一次世界大戦の諸問題について最新の研究成果が紹介され、活発な議論が行われた。コンドラシン氏は、故ダニエロフ教授の門下生であり、とくに内戦期の農民運動、スターリン時代の飢饉についての本格的な研究があるほか、この二つのテーマおよび第一次世界大戦期のペンザ県に関する大がかりな史料編纂事業の成果を刊行している(注)。

まず左近氏は、20世紀初頭のロシア帝国の諸問題を海域から俯瞰し、オデッサとウラジオストクという帝国の両端において経済競争と国際関係からそれぞれ独逸あるいは日本に対抗する利害から自由港制の問題が起こったという経緯を実証し、それが第一次世界大戦の開戦の背景にあったと主張した。そして広岡氏は、第一次世界大戦期におけるロシアの避難民について、その定義、人数、避難民である非ロシア諸民族(ポーランド人、ユダヤ人、アルメニア人、ドイツ人入植者、ウクライナ人、ラトヴィア人等)とロシア人の動向、「福祉」(タチアナ委員会、ゼムストヴォ、都市連合、補助金)の問題を詳細に解明した。この二報告を受けてコンドラシン氏は、今回編纂したペンザ県の史料集を踏まえ、第一次世界大戦期の同県における最も重要な問題を紹介した。民衆の意識(愛国心、厭戦)、動員・徴兵拒否、革命後のソヴェトの反戦的活動とその影響、兵士の規律弛緩、農業への打撃と農村の動向(政府による穀物買上、穀物不足、労働力不足、食料難、密造酒製造、地主地収奪等の「共同体革命」、工場・職人による軍需(軍事用品、手榴弾信管、航空機体等)生産、革命後の労働者ストライキ、地方行政(県知事、警察)・ゼムストヴォの活動と役割、数万人の避難民(75%は「ロシア人」、その他は非ロシア民族)受入および支援組織(タチアナ委員会等)とその活動、戦傷者・難民にたいする正教会の活動とその大きな役割、一万人のドイツ人捕虜への対応等々である。この三報告をめぐり、開戦の要因、避難民の現実、一地方の現実と役割等について質疑応答が活発に行われ、議論はロシアにおける第一次世界大戦の意義にまで及んだ。

(注) 主要な著書: Крестьянское движение в Поволжье в 1918 - 1922 гг. М., 2001; Голод: 1932-1933 годы в советской деревне (на материалах Поволжья, Дона и Кубани). Самара-Пенза, 2002; Голод 1932 - 1933 годов: трагедия российской деревни. М., 2008; Крестьянство России в Гражданской войне: К вопросу об истоках сталинизма. М., 2009; Люди во времени: Записки историка. Пенза-Саранск, 2012. 主要な史料編纂: Трагедия советской деревни: коллективизация и раскулачивание, 1930-1933 гг. т. 3, М., 2001; Крестьянское движение в Поволжье 1919-1922. М., 2002; Нестор Махно. Крестьянское движение на Украине 1918-1921. М., 2002; Голод в СССР. 1929-1934 гг. 3 т., М., 2011-2013; Пензенская губерния в годы Первой мировой войны. 1914 - март 1918. в 2 кн., Прага, 2014. 翻訳論文: 「一九一八年から一九二二年のヴォルガ地方における農民運動」(半谷史郎訳、『ロシア史研究』69, 2001)、「1918-21年のウクライナにおけるマフノー運動の本質について」(梶川伸一訳)「ロシアとウクライナにおける1932-1933年飢饉: ソヴェト農村の悲劇」(奥田央訳)(いずれも奥田央編『20世紀ロシア農民史』社会評論社、2006年)、「1930年代初めのソ連における飢饉発生メカニズム」(浅岡善治訳、野部公一・崔在東編『20世紀ロシアの農民世界』日本経済評論社、2012年)。

【献本について】

以下の書籍を著者より事務局に恵贈いただきました。油本真理『現代ロシアの政治変容と地方：「与党の不在」から圧倒的一党優位へ』(東京大学出版会)



(写真はシンポジウムの様子)

【今後の例会の予定】

次回例会は、4月18日(土)15時より、青山学院女子短期大学本館2階小会議室にて行います。長谷川雄之氏(東北大学・院)に、「(仮)現代ロシアにおける安全保障法制-政策決定機構に関わる法整備を中心として-」という題で報告していただきます。皆様ふるってご参加ください。

ロシア史研ニューズレター
第97号 2015年4月3日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(金山浩司、立石洋子)
〒169-8050
東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学 教育・総合科学学術院
小森宏美研究室気付
